

## 日蓮文書の研究（1）

小林正博

### はじめに

日蓮文書という場合、日蓮の真蹟が現存する文書から日蓮文書と伝えられてきたものまでを総称している。いわば確実なものから不確かなものまで混然一体となった日蓮文書集（御書）が編纂され、今我々が目にしていることになる。そこには日蓮滅後七百年を超えた時間的な経過の中で、日蓮文書群が乱雑に形成されてきた事情がある。

本稿は、これら多数の日蓮文書とその内容がどのような過程を経て御書に組み入れられてきたのか、またそこにはどのような問題が内在しているのか、を明らかにし、普遍的、客観的な御書のありようを追究することを主眼にするものである。

そもそも日蓮文書の総数を把握すること自体が難題である。日蓮が残した著作、図録、経論の写本、門下への消息類は膨大な量になって現在までに伝えられている。おそらくこれほどの文書が伝えられる歴史上の人物は日蓮をおいて他にはないであろう。その量がいったいどの位なのか、その解明には多くの複雑な要素がからんでいる。題号しか伝わらない内容不明な文書の取扱い、1編を別立てして2編にするのか、2編、3編を同一のものと考えるのかといういわゆる開合の問題、一部分しか伝わらない断簡類の数え方、偽文書として途中で削除されたもの、さらに途中から挿入された偽文書・疑書の類、日蓮宗各派が所蔵する未公開の御書、地方寺院などからの新発見の文書などもあって総数の確定はむずかしいのである。

ここでは文献学的にも書誌学的にもある程度一定の学問の水準を踏まえたとされる「昭和定本日蓮聖人遺文」の挙げる日蓮文書の数をあげて参考に資しておきたい。

昭和29年（1954年）の初版本では、

正編の遺文（第一巻、第二巻） 434編

図録 30編 断簡 198編 続編の遺文 55編、 総数717編

になっている。

ところが平成3年版（1991年）の改訂増補第2刷では、

正編の遺文 443編

図録 36編 断簡 391編 続編の遺文 55編 総数925編

となっており、わずか37年の間に200編以上も増大していることがわかる。近世においても標準御書とされた「録内御書」148編と「録外御書」259編が刊行されている。これを単純に合わせても407編だから、かなりのペースで増え続けることになる。まさに御書編纂の歴史は進化し続けているといえる。そしてその御書編纂史の研究はこれまで多くの先人が手がけてきたところでもある。<sup>1)</sup>

「日蓮文書の研究」というタイトルを付けた本稿では、文献学的な視点から、御書編纂の歴史が抱える多くの問題点を始め、さまざまな疑点を挙げながら論を進めていく。疑点を解明する過程には仮説を立てて証明する作業が必要になることがしばしばである。そういう作業は根気と時間がかかり、しかも精密さが要求される。場合によっては細かい議論をする時もあり、脱線することもあるかと思う。そこであらかじめ読者の関心を喚起し便宜を図るため、本稿「日蓮文書の研究（1）」で扱う問題提起を列記しておく。

○真蹟が現存する御書は何編あるのか（表1参照）

○真蹟現存の御書は全文が現存しているのか（表2参照）

○現存率100%の御書は「録内御書」にすべて収められたのか（表3参照）

○録内御書と録外御書は御書の信頼度を図る基準となりうるのか（表4参照）

○「昭和定本日蓮聖人遺文」正編434編・「日蓮大聖人御書全集」426編の

初見年代から何がいえるか（表5-1, 5-2参照）

○御書編纂の時代区分の特徴はどのようなものか（表6参照）

○天台本覚思想が濃厚な御書群は偽作なのか（表8参照）

○録内御書の底本となる日朝本と平賀本は信頼に足りうるのか（【2】(2) 参照）

○録外御書の主要な底本である本満寺録外の本文は信頼に足りうるのか

（表10参照）

○日興写本の精度はどのくらい高いのか（表11参照）

○「日蓮花押」と「日蓮在御判」はどういうのが（【2】(3) 参照）

なお本稿で扱う日蓮文書の第一次資料として「日蓮大聖人御書全集」と「昭和定本日蓮聖人遺文」を用いることにする。日蓮文書を収集し出版された御書（祖書とも遺文ともいう）は、昭和期（1926年以後）から現在に至るだけでも何種類も出版されたが、<sup>2)</sup> その中でも、1952年（昭和27年）、日蓮の立教開宗七百年を記念して出版された「日蓮大聖人御書全集」と「昭和定本日蓮聖人遺文」は、広く普及し読まれ活用されているからである。「日蓮大聖人御書全集」（以下、「全集」と略称する）は、日蓮文献に造詣の深かった大石寺・堀日亨と創価学会教学部によって、4月28日の立宗の日に刊行を果たしたもので、発行部数においては他を圧倒している。「昭和定本日蓮聖人遺文」（以下、「定遺」と略称する）は四巻からなるが、第一巻が10月10日に発刊されている。<sup>3)</sup> 編纂は立正大学教学研究所が当たり、望月歓厚所長、鈴木一成主任の他、顧問には堀日亨も名を連ねている。当時の日蓮文献の研究成果を踏まえ、学術的にも耐えられる水準を維持し、日蓮研究の基本的テキストとして定評がある。

## 【1】御書編纂史のかかえる諸問題

### (1) 日蓮文書の概要

筆者はこれまで日蓮文書について、主に文献学的かつ数理統計的な手法をもとに研究作業を進めてきた。ここでは「日蓮文書の概観」を述べるにあたり、極力煩わしい論述は避けて、数量的に整理した結果をもとにコメントを加えていきたい。

表1：真蹟が現存する御書は何編あるのか

「全集」	「定遺」正編
「真」 175編 (41.1%)	191編 (44.0%)
「曾」 31編 (7.3%)	31編 (7.2%)
「写」 50編 (11.7%)	50編 (11.5%)
「その他」 170編 (40.1%)	162編 (37.7%)
計 426編	434編 <sup>4)</sup>

真蹟現存の御書を「真」、曾つて真蹟が存在していたことが確実な御書を「曾」、日蓮の直・孫弟子の写本のある御書を「写」とした。

約6割の文書が文献学的にも信頼性が高いことは720年もの前の人間の文書としては稀というべきであろう。「その他」が4割あることについては御書編纂史の抱える問題点とも関係がありこれについては後述する。

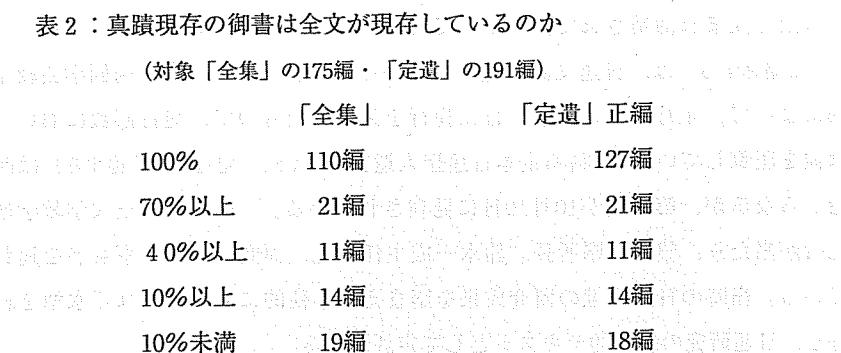


表1で真蹟が現存する文書が全体の4割を越えることが判明したが、そのすべてが全文現存しているわけではない。一つの日蓮文書において、真蹟が現存する部分の全体に対する割合を示したのが表2である。<sup>5)</sup>

真蹟のない箇所は伝えられる写本に依っており、その信頼度の目安は真蹟のある箇所について写本との相違の程度を調べればおおむね判断できる。10%未満の19編（定遺では18編）は、断簡のような状態で残っていることを示している。このうち著作の部類に入る「報恩抄」を除けばすべて檀越への消息

の類であり、消息がいかに粗略に扱われていたかを窺わせている。

## (2) 「録内御書」と「録外御書」区分の問題点

現代では、「録内御書」か「録外御書」かそれ以外かなどと気にとめることはほとんどないが、近世まではこの区分は宗学的に重要な意味を持っていた。御書編纂史の上からは第一次的集成として「録内御書」（1622年初版・当初は148編所収だが実際は非御書を除き、分離書、重複書の開合を考えれば143書となる）が日蓮の一一周忌に六老僧の認定によって成立したと信じられていた（一周忌成立説は完全に否定されている）。「録内御書」の底本を遺した身延11世・日朝の録内の目録「御書目録日記之事」に「この外は、たとえ実の御書と雖も、左右なく御書に入れるべからず」（原文は漢文）と記されているように、その権威は絶大であった。ただしその成立年代、成立母体については諸説があり定まっていないが、一周忌成立説を標榜した中山・日実の「当家宗旨名目」が記された寛正二年（1461年）以前である。「録外御書」は録内にもれた収録外の御書群をさすが、その代表として「本満寺録外」（1595年刊行・203編）「他受用御書」（1580年以前成立・108編）「三宝寺録外」（1583年以前刊行・233編）などがある。これらを集成して「録外刊本」（1662年初版・259編）が世に出るが、そこに至るまでの編纂の歩みは複雑であり、それだけに清濁合せ込めた御書群となってしまっている。しかし、一旦刊行されると「録外御書」は「録内御書」に準ずる権威をもって日蓮真撰の評価を得ることになった。

表3：現存率100%の御書は「録内御書」にすべて収められたのか

	「全集」	「定遺」正編
録内御書	(1622年) 31 (28.2%)	31 (24.4%)
録外御書	(1622年) 19 (17.3%)	20 (15.7%)
その他	60	76
計	110	127

現存率100%の文書であるにもかかわらず、録内御書が収めたのは3割に満た

ない。録外御書を含めても半分にもならないことは驚くべき事実である。いかに近世までの御書編纂がいい加減なものであったのかを雄弁に物語っている。

録内御書の成立は平賀本(1448年、のち1528年に追加)と身延11世・日朝の写本(1500年以前)をもとに148編が選定されたのであるが、これだけ真蹟が漏れているとなると収集力の欠如、収集方法の欠陥を指摘せざるを得ない。録内・録外の問題点をさらに浮き彫りにしていこう。

表4：録内御書と録外御書は御書の信頼度を図る基準となりうるのか

## 「全集」426編の区分

	内	外	受	満	三	その他	計
真	55	57		1	62	175	
曾	19	6		6	6	31	
写	24	23		3	3	50	
その他	37	90	6	13	1	23	170
計	135	176	6	13	2	94	426

まず、表の説明をする。縦の項は前述の通り「真」は真蹟現存、「曾」は曾存、「写」は直・孫弟子写本存の文書を示す。横の項の「内」は録内御書、「外」は録外御書、「受」は他受用御書、「満」は本満寺録外、「三」は三宝寺録外を示す。なお、「受」「満」「三」はいずれも録外の御書を収めており、「録外御書」の底本になっているが、その中心は身延20世に加歴された本満寺12世の日重の収集による「満」の本満寺録外である。

録内御書に「真・曾・写」以外の「その他」(縦の項目)が37編あるのに対して、録外御書では「真」だけで57編あることは、録内第1と録外第2と位置づけることの無意味さを明確に示している。かつては日蓮門流間での論争のルールとして、議論で引用できるのは「録内御書」だけというほど権威があったが、そんな神話はもう通用しないのである。

## (3) 御書編纂の時代区分

表5-1：定遺正編434編の初見年代から何がいえるか

真曾写別	御書数	真蹟存	曾存	直孫弟子写本	その他	(%)
1289-1300年	46	38	3	5	0	100
1301-1400年	106	36	13	44	13	88
1401-1500年	109	27	10	0	72	34
1501-1600年	92	27	0	0	65	29
1601-1700年	13	6	3	0	4	69
1701-1800年	0	0	0	0	0	0
1801-1900年	9	7	1	0	1	89
1901年-	59	50	1	1	7	88
計	434	191	31	50	162	62.7%

表5-2：全集426編の初見年代から何がいえるか

真曾写別	御書数	真蹟存	曾存	直孫弟子写本	その他	(%)
1289-1300年	42	35	2	5	0	100
1301-1400年	110	41	13	44	12	89
1401-1500年	106	27	10	0	69	35
1501-1600年	99	27	0	0	72	27
1601-1700年	12	4	3	0	5	67
1701-1800年	0	0	0	0	0	0
1801-1900年	16	10	2	0	4	75
1901年-	41	31	1	1	8	80
計	426	75	31	50	170	60.1%

表5は、定遺正編434編と全集426編の初見年代を年代別に区分したものである。これによってどの時代にどの位の御書が出現してきたのかを把握することが可能である。それぞれの右端のパーセントは真・曾・写の御書の全体に対する割合を示している。この割合が高いほど日蓮文書としての信頼性が高くなる

が、1400年までに現れる御書は当然ながら高率である。その後年代が下るにしたがってこの割合は落ちていくかというとそうではない。1801年以降の割合がふたたび高くなっているのである。これは19世紀以後に新たに発掘された真蹟が公表されるようになったからである。問題なのは15世紀と16世紀で、信頼度は3割前後でしかない。

いずれも100編前後とかなり多くの御書が出現した時代に当たるが、文献学的には問題のある御書群なのである。当然これらの中には偽書として混入してきたものもあると考えられる。ただどれが確実な日蓮文書でどれが偽書なのか、内容面での検討を慎重にする必要があり、軽々に判断を下すべきではない。

さて、この表をもとに現在我々が見ることのできる定遺正編434編と全集426編の編纂過程を時代別に特徴づけてみよう。

表6：御書編纂の時代区分の特徴はどのようなものか。

時代区分	時代名	特記事項	全集の各年代初見
1300年以前	各派秘蔵時代	富木常忍「常修院本尊聖教事」	100%
1300年代	直孫弟子写本時代	日興写本と中山日祐「本尊聖教録」	89%
1400年代	写本収集時代前期	録内御書の成立　日朝目録と平賀目録	35%
1500年代	写本収集時代後期	録外御書の成立	27%
1600年代	刊本時代	録内・録外の刊本化	67%
1700年代	停滞期	刊本の出現により固定化	0%
1800年代	新発掘前夜	大石寺日勝の「祖書校本」が大半	75%
1900年代	諸御書発刊時代	「縮冊遺文」を底本として諸御書の発刊	80%

御書編纂史上の大きな問題点は、1600年代の御書の刊本化（印刷発行）による権威化、固定化にある。このことは1700年代の停滞期とも密接に結びついている。それは日蓮宗各派共通の日蓮文書集刊行の要請に応えて、「録内御書」（寛永20年本〈1643年〉が最も普及）と「録外御書」（寛文2年本〈1662年〉が最も普及）が

1600年代に発行され、ほぼ編纂の歩みに終止符を打ってしまったからである。これによって「録内御書」「録外御書」が教団全体の標準御書として「録内」の権威化、それに準じる「録外」の位置づけも確立した。日蓮宗共通の聖典として御書が出版され普及していくと、本文を校訂するというような動きはかえって混乱を招くのか、封じ込められる。おそらく新発見、新発掘の文書が出てきても「録内御書」「録外御書」にもれてしまえば、宣揚することもままならなかったであろう。固定化された刊本の御書の普及の次に要請されることは、御書の解説書・手引き書の刊行であった。「録内啓蒙」（日講・145編・1695年成立・1702年刊行）「録内扶老」（日好・134編・1728年成立・1740年刊行）「録内拾遺」（日好・133編・1718年成立・1732年刊行）「録外微考」（日好・167編・1735年刊行）などが立て続けに刊行されていったのである。

18世紀は檀家制度も定着し、仏教界全体を覆う保守化傾向の中で、日蓮宗各派は檀林を設け教学の研鑽に取り組む一方、自派教学の独自性を主張し、その宣揚に努めている。宗内の教義論争の際、依用する御書は「録内御書」を第一次資料とし、「録外御書」を第二次資料とし、それ以外の御書を用いるのは論外だったのである。このように、「録内御書」と「録外御書」の権威はきわめて高いものがあった。わずかに真偽論争が見られ、その成果が「録内・録外」の刊本に反映されることもあったが、十分な見直しをしないままの性急な「御書刊行」は、後の時代に多大な瑕疪を残すことになる。

1800年代以降、加えられた新発掘の御書はかなりの数に登り、その大量導入によって録内・録外区分の有効性は完全に崩壊してしまう。そして御書編纂史は現代の諸御書の発刊という新しい時代を迎えることになる。

#### (4) 諸御書のルーツ

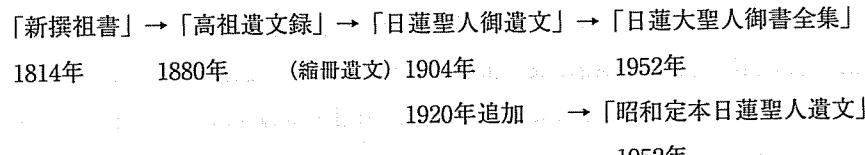
1900年代すなわち20世紀は御書編纂史上、画期的な進歩を遂げた。その中にあって「全集」と「定遺」の両書は、同じ年に発刊されたこともあるルーツをたどると共通していることがわかる。それは靈良閣版「日蓮聖人御遺文」（縮冊遺文と称されていた、以下、「縮遺」と略称する。1904年に正編と第一統集79編が、

1920年に第二続集29編が刊行された)である。この書は立宗650年(1902年)を記念して、加藤文雅の発願により刊行されたものである。

実はこの「縮遺」にも底本がある。それは在家の小川泰堂による「高祖遺文録」で1880年に木版刷、計30巻387編を収めて刊行され、1885年には活字本、計20巻にして改訂刊行された。

そして、この「高祖遺文録」が底本にしたものこそ智英日明の「新撰祖書」である。「新撰祖書」は1814年に日明が収集書写していく計3800紙50巻にも及ぶもので、未刊行のままになっていたのを小川泰堂が入手して、これをもとに「高祖遺文録」を刊行したのである。

以上述べてきたルーツの系譜を図示すれば次のようになる。



しかし、人間に例えれば曾祖父に当たる日明の「新撰祖書」と曾孫に当たる「全集」と「定遺」の間には、内容的にかなりの違いがある。これはいうまでもなくこの四代にわたる御書発刊の経過の中で、原文校訂がより正確になされた結果である。

その改正の跡を具体的にたどって見よう。

### ①「新撰祖書」

日明は50巻に及ぶ「新撰祖書」の目録を作成している。「新撰校正祖書目次」といい、その自序によれば「凡四百十 新加入共」と記している。およそ410編にした経緯についても触れており、重複するもの33編と非御書2編を除き、1書を2書に開き、2書あるいは3書を1書に合わせたものの一覧も載せ、新たに追加した52編を提示している。

しかし、ルーツとして位置づけられ重要視される日明の「新撰祖書」は、前

時代までに刊行されてきた「録内御書」と「録外御書」を基本的に踏襲しており、近代御書の先駆けといえるほどの画期的内容を備えていたとは言いがたい。52編(ただし13編は題号のみあって該当する御書が不明)を追加したものの「新撰祖書」を初見とするものは3編しかなく、しかも「定遺」ではいずれも続編扱いの御書である。<sup>6)</sup> しかも録外御書を代表する「他受用御書」「三宝寺録外」「本満寺録外」のいずれかに有っても「刊本録外」では認められなかった御書を22編も挿入している。これがのちの「定遺」正編で19編、「全集」で20編の加入につながるのである。<sup>7)</sup> これらの挿入の事情についてその是非が論じられてこなかったことははなはだ遺憾であり、無批判に御書として受け入れて良いのか、きちんと検討すべき課題であることは明記しておきたい。

あえて「新撰祖書」の貢献をあげるなら重複部分を調べ、除去した33編と「非祖書」として2編(統52「臨終一心三觀」と「良実状御返事」)を除いたことである。また特筆すべき点は、大石寺の堀日亨が「新撰祖書」を高く評価していることである。堀日亨は大正9年に『大日蓮』で「宗門における祖書編纂について」という連載の論考で「本因妙抄百六箇抄産湯相承等の如き富士門流依用の御書を悉く列ねてある。其に此師は内心富士門に傾いてありしとの事で、現今当門流の尾北の信徒の殆ど開祖たる岩田淨俊の如きは、此の明師の弟子であつて、御書編纂の手伝を永い間勤められたのである。」(『大日蓮』大正9年3月号9頁)という通りである。

### ②「高祖遺文録」

ともかく日明の「新撰祖書」は刊行されることなく、しばらくお蔵入りの状態であったが、在家の小川泰堂の「高祖遺文録」(計387編・1865年に稿本完成・1880年刊行)について日の目を見ることになる。泰堂は日明の業績をもとに全国をまわって真蹟との対照を行い、系年の再検討、偽書の削除なども行い、近世の刊本として流布していた「録内御書」「録外御書」に代わる近代版の御書発刊の偉業を成したのである。ただし、「高祖遺文録」所収の御書は387編と少なく、これまで伝わってきた御書の精選という感がある。

小川泰堂の学究的態度は、疑義のある御書を思い切って削除したことに現れている。「新撰祖書」に収められた御書でも「高祖遺文錄」では載せなかつたものは24編を数える。「定遺」の108,345,図4,続8,続12,続16,続17,続20,続21,続25,続26,続27,続29,続31,続33,続35,続37,続38,続39,続42,続43,続44,続45,続46である。「定遺」が続編（疑義のある御書を集めた）に収めた御書が21編あることは、「高祖遺文錄」によるところが大きいといえよう。

なお定遺No.108「安国論送状」（全集は「安国論別状」35頁）はわずか本文26字の短文のため削除したのだろう。定遺345「滝泉寺申状」は日蓮文書として扱わなかつたのかはなし、図4「三種教相」は要文抄出のため削除したと考えられる。反対に「新撰祖書」になくて「高祖遺文錄」に加えられた御書が20編ある。定遺No.74,162,195,211,258,260,389,393,410,411,412,413,415,416,418,419,420,421,422,423である。この20編所収の事情は次のように考えられる。

74「上野殿母尼御前御書」（全集は「上野殿母尼御前御返事」1515頁）は真蹟現存・中山法華経寺蔵で「新撰祖書」の「與上野母尼」（新加入之分にあり、該当する御書が不明）ではないか。162「富木殿御返事」（全集968頁）195「御衣並單衣御書」（全集971頁）211「富木尼御前御書」（全集は「富木尼御前御返事」975頁）389「富木殿御返事」（全集978頁）はいずれも真蹟現存・中山法華経寺蔵で泰堂が発掘したか「祖書続集」（英園日英・1842年刊行）から持ってきたかどちらかであろう。258「四条金吾殿御返事」（全集1170頁）は「祖書続集」からか。260「兵衛志殿御書」（全集1095頁）は「録外刊本」に所収、むしろ「新撰祖書」になぜないのか不明である。393「智妙房御返事」（全集1286頁）は真蹟現存・中山法華経寺蔵で泰堂の発掘であろう。410以下は弘安4年下半期分で「新撰祖書」の目録でぬけ落ちた可能性があり、これについては前述した6参照）。

### ③「日蓮聖人御遺文」（縮遺）

その偉業をさらに発展させ完成度の高い御書として発刊されたのが靈良閣版とも縮冊遺文とも言われる「日蓮聖人御遺文」である。本編は387編だから「高祖遺文錄」と同数である。しかし、「日蓮聖人御遺文」の大きな成果は追加編

（第一、第二続集）を出し、日蓮宗の諸寺院に格護されていた未公開の真蹟現存御書を収め公表したことである。これによって中山法華経寺や大石寺に伝えられてきた真蹟の御書が広く一般に読まれるようになった。このように新発掘された御書が第一続集では79編も追加され、さらに第二続集では29編が追加された。なんと108編もの大量の御書が公表されたことになる。しかも108編のうち真蹟現存が第一続集で51編、第二続集で10編、計61編もあり、それだけ新発掘への努力の窺える追加だったである。ただし第二続集には問題もある。真蹟の現存していない21編（日興写本存の「滝泉寺申状」は除く）は「高祖遺文錄」などで疑義があるとして削除された御書で、それを復活させ追加したことである。「全集」では21編中、「釈迦一代五時継図」（633頁）「一代五時継図」（658頁）を取り入れている（両書とも「録外御書」）。

しかし、「縮遺」の功績は、真蹟現存の御書について稻田海素が真蹟対照をほぼ完ぺきに実施しており、その対照作業の場所・日付まできちんと記していることで、これは研究者にとって貴重な情報を提供してくれている。

ともあれ、「縮遺」の刊行は未収の真蹟御書の公表によって近世までの御書編纂史の致命的欠陥の一つがようやく解消されることになる。中山法華経寺に伝わる御書の目録「常修院本尊聖教事」（1299年作成）「本尊聖教録」（1344年作成）は実に650年以上前から存在し、大石寺にも多数の真蹟が存在していたのに、録内御書にももれるという実態を表7で再確認しておきたい。

表7 中山・大石寺蔵真蹟は「録内」「録外」に反映されず

	録内	録外	祖書続集	縮遺初見	計
中山法華経寺所蔵の真蹟	28	7	7	11	53
大石寺 所蔵の真蹟	5	7	0	15	27

中世から近世の編纂史を思う時、真蹟さえきちんと掌握できなかった疎漏さと入手した写本の真偽判定を棚上げにしてやみくもに取り込んだ無責任さを引きずったまま、近代の御書編纂の時代を迎えたことはきちんと認識しておく必要があろう。

## 【2】本文比較

## (1) 真偽論

次の検討事項は、御書本文の信頼性の問題である。内容的な分析からその真偽を判定する場合いくつかの視点が考えられる。これまでの研究では概要次のような視点と疑書（真偽未決書）・偽書に該当する御書が提示されてきている。

1, 天台本覚思想が濃厚だから

例「十八円満抄」「当体蓮華抄」

2, 一つの特定の門流だけが正統であることを強調しているから

例「日蓮一期弘法」「日朗御譲状」

3, 寺院の経済基盤安定をめざし、僧への尊崇を強調していることが明らかだから

例「十王讚歎抄」「回向功德抄」「彼岸抄」「出家功德抄」「本寺參詣抄」

4, ある御書の一部分と全く同じか、寄せ集めだから

例「寿量品得意抄」「法華本門宗要抄」「波木井殿御書」

5, 特定の法門の優越、特定の諸尊・門下をことさらに強調するものだから

例「新池御書」「大黒天神御書」「遠藤左衛門尉御書」

以上のように、このような疑偽の判定は鋭い指摘ではあっても決定打とはなりえないと思う。だれが何を目的に日蓮に仮託して創作したのか、はっきりしているものは一つもない。真偽論はもっと幅広い歴史学的、社会学的な研究方法も結集して慎重な議論がなされなければならない。

例えば、天台本覚思想が濃厚な御書に対する偽作論を主張する研究者が多いが、そのやり玉にあがっている御書群を文献学的に一つ一つ調べてみよう。ここでは田村芳朗「天台本覚思想と日蓮教学」（『中世法華仏教の展開』105-147頁 平楽寺書店・1974年）や『鎌倉新仏教思想の研究』（平楽寺書店・1965年）で疑義有りとして挙げた御書を対象とする。表8にまとめてみたが、出現の様相はまちまちで、同時期に限られた場所で小数の人で作成された一かたまりの御書群でないことは明かなのである。

表8 天台本覚思想が濃厚な御書群は偽作なのか（○は記述有り）

## 「無作三身」があるもの

定遺No.	全集頁		初見年代	初出の文献
134	510	当体義抄	- 1314	「金綱集」
348	558	三世諸仏總勘文抄	1334	日祐目録
403	1021	三大秘法稟承事	1397	日時本
141	なし	授職灌頂口伝抄	1461	「當家宗旨名目」
123	892	義淨房御書	- 1500	日朝録外本
続32	なし	成仏法華肝心口伝身造抄	- 1500	日朝録外本
281	1276	教行証御書	- 1500	日朝録外本
講記	804	御講聞書	1528	日増本
講記	701	御義口伝	1571	元龜本
続33	なし	無作三身口伝抄	- 1580	他受用御書
383	1260	妙一女御返事	- 1580	他受用御書

## 「日蓮滅後の爛熟した天台本覚思想の見える文献」

続01	なし	戒法門	- 1500	日朝録外本
続02	なし	色心二法抄	- 1500	日春本
続10	なし	十二因縁御書	- 1500	日朝録外本
12	なし	総在一念抄	- 1500	日朝録外本
続13	410	十如是事	- 1500	日朝録内本
続14	412	一念三千法門	- 1583	三宝寺録外本

## 「四重の興廢」があるもの

158	527	立正觀抄	- 1330	日進本
16	417	十法界事	1448	平賀本
「その他」				
43	474	聖愚問答抄	1318	日像「曼荼羅相伝」
209	1304	阿仏房御書	1448	平賀本

116	なし	法華宗内証仏法血脉	1461	「当家宗旨名目」
122	1358	諸法実相抄	- 1500	日朝録外本
256	1243	日女御前御返事	- 1500	日朝録外本
続39	なし	当体蓮華抄	- 1500	日朝録外本
39	1504	上野殿後家尼御返事	- 1500	日朝録内本
95	1336	生死一大事血脉抄	- 1500	日朝録外本
105	1116	四条金吾殿御返事	- 1500	日朝録外本
298	1519	妙法尼御前御返事	- 1519	日意本
続40	1362	十八円満抄	- 1580	他受用御書
97	1338	草木成仏口決	- 1583	三宝寺録外本

(—1344などのーは1344年以前の成立を示す)

## (2) 「日朝録内」と「本満寺録外」 附：「日興写本」

果たして日蓮文書の本文は原文のまま正確に現代まで伝えられているのだろうか。ここでは御書そのものの「真偽」を論じるのではなく、本文に対する「信疑」を論じていく。本文そのものが日蓮の原文通りではなく、改竄されたり、書写もれがあったり、漢字をかなに、またかなを漢字に変えたりしていないか、という危惧が晴れるのか、的中するのか、とにかく本文の検討をしてみよう。

### ①「日朝録内写本」

対象とすべきは、録内については日朝写本と平賀本、録外については刊本の「本満寺録外」である。いずれも主要な底本となっており、「定遺」では日朝写本を底本とする御書は74編、平賀本は29編、「本満寺録外」は72編を数えるから実に4割の御書がこれらを底本としていることになる。残念ながら日朝本と平賀本は管見できないこともあって筆者の調査は十分ではない。ここでは録内御書についての立正大学の冠賢一氏の研究（「中世における日蓮遺文の書写について」「棲神」65号・1993年）を引用させていただく。冠氏の論文は、北山本門寺に1409年頃、信伝なる僧が書写したという11通の御書をもとに、これと「日朝本録内御書」「平賀本録内御書」の本文比較を行い考察を加えている。この三写本で真

蹟が現存する箇所を対照させた結果、例えば真蹟との相違箇所が「寺泊御書」の場合、信伝本18箇所、平賀本62箇所、日朝本64箇所あり、「真言諸宗違目」では順に23、27、46箇所あるとしている。そして、結論として冠氏は次のように締めくくっている。「ここで取り上げた最古の写本録内御書である平賀本・日朝本は、多く問題がある。しかし、『定本遺文』は、この両写本を真筆の欠失する部分を復元するための史料として多用する。それは両写本が、現時点においては日蓮聖人の書かれたであろう文章に復元する最良の写本遺文だからである。しかしながら、今後、平賀本・日朝本の両写本のみならず、真筆を欠失する遺文の復元のための写本・刊本には、より厳密な書誌学的の考察を深めていかなければならないであろう。」（同88-89頁）

### ②「本満寺録外」

録内御書も問題なら録外御書はなおさらという危惧の念が生じてくる。

ただ表4で前述したように、「全集」所収の「録外御書」176編中、「真」は57編、「曾」は6編、「写」は23編あって半分以上は文献学的にも信頼性の高い御書だから、これらを刊行した「録外御書」の収集者たちへは十分にその労苦を伝えたい。

ここでは「本満寺録外」を例にとってその信頼度を検討してみる。使用したテキストは刊本本満寺録外の母胎となった身延20世の日重が遺した写本である。これは文禄4年（1595年）に編纂されたもので昭和41年に梅本正雄によって刊行された。本満寺録外は203編を数えるが、そのうち「本満寺録外」が初見となる御書は13編である。<sup>8)</sup>

意外と少ないが、これは同じ録外の「他受用御書」（1580年までの編集・全108編）と「三宝寺録外」（1583年・全233編）の方が初見年代では先行している理由による。しかし、「本満寺録外」を問題にする理由は前述した通り「定遺」が本満寺録外を底本としている録外御書が72編とかなり多いからである。この72編は「他受用御書」と「三宝寺録外」にも収められ重なっているものが多いが、「定遺」では「本満寺録外」に最も信頼を置いて底本としているのである。

さて、ここでは事例として「南条時光への賜書」にしほって検討する。日蓮は南条時光を上野殿と称して檀越中最も多く消息を送っている。真蹟が現存するものが多く、さらには日興写本が現存するものも多い。

おそらく消息を書く場合、下書きをしてから清書することはまずなかっただろうから、「南条時光への賜書」が日興門流以外の日蓮門下に流布したのは、南条家所蔵の真蹟を書写したか、日興写本を転写したかのいずれかであろう。「本満寺録外」所収の「南条時光への賜書」も入手先は南条家所蔵の真蹟か日興門流のルートであろう。不思議なのは、「南条時光への賜書」のうち録内が13編、録外が30編と別れていることである。これはその大半が真蹟現存の「富木常忍・大田乗明への賜書」を厳護してきた中山門流でもいえることで、録内御書と録外御書の編纂に日興門流富士派と中山門流は関与した形跡がない証拠ともなるのである（表7参照）。

さて、「南条時光への賜書」で日蓮の真蹟か日興写本がある「本満寺録外」は次の8編がある。

満27 上野殿御返事	(全集1537頁・昭定No.246・縮造1549)	真蹟存	日興写本存
満56 南条殿御返事	(全集1541頁・昭定No.185・縮造1591)	真蹟存	日興写本存
満112 上野殿御返事	(全集1561頁・昭定No.357・縮造1891)	真蹟存	日興写本存
満29 上野殿御返事	(全集1552頁・昭定No.314・縮造1813)	日興写本存	
満92 上野殿御返事	(全集1577頁・昭定No.402・縮造2049)	日興写本存	
満111 上野殿御返事	(全集1544頁・昭定No.276・縮造1709)	日興写本存	
満193 上野殿御返事	(全集1566頁・昭定No.377・縮造1978)	日興写本存	
満194 上野殿御返事	(全集1511頁・昭定No.177・縮造1173)	日興写本存	

これら8編の本文について、「本満寺録外」「日興写本」「日蓮真蹟」の同一箇所を対照させて「本満寺録外」の信頼度を判じていく。方法としてはまず「漢字」と「ひらがな」あるいは「カタカナ」の使用度合いの相違を比較した。この方法を用いたのは従来から抱いていた筆者の関心によるものである。「南条時光」への賜書は日蓮の真蹟が多数現存しており、その写真版（『日蓮聖人真蹟集成』第9巻・1976年・法藏館）の文字を翻刻していた際、漢字の使用が極端に少ないこ

とが気になっていた。そこで、真蹟現存の南条時光への賜書16編で使用する「漢字」の使用率を計算してみるとわずか19.5%（合計11226字の内、漢字は2192字）であることがわかった。その一方で他の門下たち、例えば富木常忍や大田乗明などの場合は漢文の賜書まであるわけだから漢字使用率がかなり高いことが予想された。檀越によって漢字使用率が大きく異なることは、日蓮の門下一人一人の立場に立った細やかな心配りが伝わってくるようである。門下ごとにその違いを数値で示したのが表9である。

表9 檀越への消息における「漢字使用率」<sup>9)</sup>

		漢字使用率	対象真蹟数
有	男 富木常忍	54.5%	( 15 )
女	大田妻	50.9%	( 1 )
有	男 大田乗明	50.5%	( 2 )
有	男 曽谷教信	47.6%	( 2 )
	男 四条金吾	47.4%	( 6 )
有	弟 三位房	46.5%	( 2 )
	弟 浄顕房	42.0%	( 1 )
	女 千日尼	41.1%	( 2 )
	男 西山	38.0%	( 2 )
	女 日妙+乙御前	37.6%	( 2 )
	男 高橋	36.8%	( 2 )
	女 四条妻	34.4%	( 1 )
有	男 池上弟	34.3%	( 7 )
	男 南条父	34.1%	( 1 )
	女 妙一	34.0%	( 1 )
	女 富木妻	32.7%	( 4 )
	男 池上兄	32.1%	( 2 )
	女 松野妻	31.4%	( 2 )

男 松野	29.7%	( 2 )
女 南条母	22.9%	( 6 )
男 南条時光	19.5%	( 16 )
女 窪尼	15.0%	( 2 )
女 光日房	13.6%	( 2 )

有：漢文体の真蹟遺文を与えられた門下

男：男性の檀越 女：女性の檀越 弟：出家弟子

この数値は、1～2編しか真蹟が現存していない門下も多いので、あくまで参考として提示する。これによって檀越の教養のレベルをある程度推し量ることができるとと思う。

さて、ここでは南条時光への賜書における19.5%の漢字使用率を踏まえた上で「本満寺録外」の写本の信頼度を論じてみよう。表10は漢字使用率をまとめたものである。実際の漢字数、かな・カナ数の一覧は註で示しておく。<sup>10)</sup>

表10 錄外御書の主要底本である本満寺録外の本文は信頼に足りうるのか

漢字使用率の比較（単位%）

	本満寺録外	日興写本	日蓮真蹟
満27 上野殿御返事	25.0	21.3	21.1
満56 南条殿御返事	35.2	39.0	30.2
満112 上野殿御返事	35.2	27.2	26.1
満29 上野殿御返事	57.1	12.5	
満92 上野殿御返事	39.7	29.9	
満111 上野殿御返事	47.7	33.2	
満193 上野殿御返事	44.2	35.8	
満194 上野殿御返事	50.0	30.4	

表10から言えることは「満56」の南条殿御返事を除けば、漢字使用率は「満

外」、「日興写本」、「日蓮真蹟」の順に低くなっていることがわかる。特に「満29」の上野殿御返事は漢字使用率が57.1%と異常に高く、表10で最高率の富木常忍をも越えている。これは、真蹟を書写するとき、原文通り書写するという意識がなく、かな文字をどんどん漢字に変えて写していることを示している。もちろん「満外」編集者が漢字化したのか、入手した何回かの転写本自体がすでに漢字化されていたのかは定かではないが、いずれにしても原文のかながかなりの度合いで漢字化され、我々に伝えられてきている御書も存在することを認識しておく必要がある。

次に「本満寺録外」で対照にした8編の本文の内容について、気がついた点を記しておく。「満27」は真蹟現存箇所については良好だが、校訂した跡がかなり見られる。また13字の脱落がある。「満56」は真蹟の「小白麦一俵」が「小麦俵一」と誤記し、追伸部分を欠落させるという欠陥が指摘できる。「満112」は漢字化の問題以外は良好である。「満29」は途中32文字の脱落がある。日付も日興写本の「十月十二日」を「十一月十三日」とし、漢字使用率は日興写本のそれをはるかに上回っている。「満92」も日付を日興写本の「三月十八日」を「三月十一日」としている。「日興写本」との相違も6箇所見られる。「満111」は良好だが漢字使用率が高い。「満193」は比較的良好だが「日興写本」との相違が6箇所見られる。「満194」は13字の脱落がある。漢字使用率も50%と異常に高い。

以上のように、わずか8編を対象に「本満寺録外」の問題点を指摘してきたが、真蹟原文との相違はかなりあると断ぜざるを得ないというのがここでの結論である。しかし、原文の復元作業は現在得られる史料の中から行うのは、限界があることも事実である。

### ③日興写本

次に関連することがらでもあり、筆者の関心事でもある日興写本の精度について触れておきたい。資料として用いたのは「富士大石寺蔵日興上人御筆 日蓮大聖人御書」（日興写本の写真版、31編所収、妙真寺発行・1987年）で、真蹟が現存している以下の9編について検討する。対象とする御書の量としては十分とは

言えないが、日興の真蹟書写の姿勢は浮き彫りにできると思う。

表11 日興写本の精度はどのくらい高いのか

(日蓮真蹟と日興写本の相違箇所数は漢字・かなの相違は除いた)

「全集」での 真蹟との かな化 漢字化

真蹟現存行数 相違箇所

高橋入道殿御返事	全集1458頁 定遺No.187	57	8	7	1
窪尼御前御返事	全集1478頁 定遺No.288	7	3	0	5
窪尼御前御返事	全集1481頁 定遺No.333	1	0	0	0
上野殿御返事	全集1537頁 定遺No.246	9	0	2	4
南条殿御返事	全集1541頁 定遺No.185	14	3	0	18
種種物御消息	全集1547頁 定遺No.299	7	3	3	2
上野殿御返事	全集1560頁 定遺No.350	23	2	4	14
上野殿御返事	全集1561頁 定遺No.357	15	4	2	6
法華証明抄	全集1586頁 定遺No.429	23	4	1	3

表12 真蹟との相違内容

御書名 相違箇所数 「日蓮真蹟」 「日興写本」

高橋入道殿御返事	8	天親菩薩等	→天親菩薩に
		せめられし	→せめられしがごとく
		ちかうゆへ	→ちかいしゅへ
		安穩なるべくも	→安穩なるべくは
		せめたり	→せめるなり
		律僧等の	→律僧等が
		念佛と	→念佛と
		御かたき	→かたき
窪尼御前御返事	3	棕五把	→棕
		第十本	→筈

千日ひとつ →さけ

窪尼御前御返事	0	なし
上野殿御返事	0	なし
南条殿御返事	3	ついでも →ついでは うえしにゆべき →うえしにぬべき
		こ金 →金

種種物御消息	3	河は →河 物たまわりて →もの給いて こへ →うゑ
上野殿御返事	2	なさんと →なんと 御返事なり →御返事也候
上野殿御返事	4	経文に →経に うれしき事 →うれしき 正直物 →正直の物 衣もうすくて →衣うすくて
法華証明抄	4	いかんが →いかが ちち →はは 敵子 →嫡子 言をいやしみて →言いやしみて

漢字化・かな化の問題については表10であげた「日興写本」の数値と表11を見てもわかるように、日興は真蹟原文に忠実に書写したとは言いがたい。かなり精度の高い書写もあるが、定遺No.185や定遺No.350のように日興の意に任せた漢字化への変更が目立つ写本もある。

しかし、表12の真蹟との相違を具体的に見ていくかぎり、2箇所のゴシック体の部分には問題があるものの全体的には信頼度はきわめて高いと断ずることができる。それは「日朝録内写本」「平賀本録内写本」「本満寺録外」よりはるかに真蹟原文に近い精度を誇っているのである。

## (3) 「日蓮在御判」と「日蓮花押」の表現

これまで「日蓮在御判」と「日蓮花押」の違いはほとんど論じられずにきた。ここではなぜこの表記が混在しているのか、またどう表記されるのが適切なのかを考えてみたい。

まず、この二つの表現が混在した原因は、「縮遺」の第一統集にある。<sup>11)</sup>新発見の真蹟を書写して新たに加えたものだが、その際花押部分を「在御判」と記したのである。「全集」はそれを踏襲したため混在する結果となった。

本来、古文書を翻刻する場合、真蹟に花押がある印として「在判（ありはん）」と表記する。「縮遺」の第一統集が「在御判」としたのは、特に判（花押）を尊重して「御判」とした上で「在御判（ありおんはん）」としたのであろう。

とすれば、「日蓮花押」と表記した場合との違いはないに等しい。あえて違いをいうなら、文書の表現に従えば「日蓮花押」、翻刻のあり方に従えば「日蓮在御判」となる。しかし、真蹟がある以上はその表現通り「日蓮花押」とするのがよい。

むしろ問題は、署名と花押部分の真蹟がない場合の表記の仕方である。量的にはこちらの方が多い。真蹟の有無を基準に違いを区別する表記法も意味があると考え、次の原則を考えてみた。

花押部分の真蹟が現存している・・・「花押」

花押部分の真蹟が現存していない・・・「在御判」

この原則に従えば「花押」を「在御判」と変えるべき御書は213編にも及ぶ。<sup>12)</sup>また「在御判」を「花押」とすべき箇所、つまり真蹟が現存するものは908, 934, 964, 964, 987, 1108, 1178, 1223, 1285(後), 1302, 1396, 1492, 1588(いずれも「全集」の頁)の13箇所である。

以上のように改訂すれば、真蹟の有無が明確になるというメリットは確かにあるが、これだけの量の変更はそれ以上のデメリットが予想され、大いにためらうところである。むしろ少ない変更点、「在御判」を「花押」に直せばいいと思う。ということは「在御判」はなくして、すべて「花押」にしてしまうのが一番混乱がないということである。したがってここでは「花押」部分が真蹟に

あるかないかを知りたい人のために資するための一覧資料として註12に提供するにとどめておきたい。

## 註

- 1) 多数あるが特に本稿執筆の上で恩恵を蒙ったものを挙げておく。
  - ・浅井要麟「御書編纂の史的概観」(1934年『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別巻所収1976年版)
  - ・塩田義遜「御遺文収集史上に於ける上古三聖」(『棲神』17号・1931年)
  - ・鈴木一成『日蓮聖人遺文の文献学的研究』(山喜房仏書林・1965年)
  - ・稻田海素「祖書鑽仰史談」(『大崎学報』85, 86号・1935年)
  - ・堀日亨「宗門に於ける祖書編纂について」(『大日蓮』連載1920-1年)
  - ・宮崎英修「日蓮聖人遺文の文献学的研究－録内御書成立に關し」(法華經研究Ⅱ『近代日本の法華仏教』347頁・平楽寺書店・1968年)
  - ・高木豊「遺文の写本について」(『大崎学報』125.126合併号・1971年)
- 2) 『日蓮大聖人御書新集』佐藤慈豊編・大石寺 1929年  
 『日蓮聖人御遺文』高佐貫長編 本化聖典普及会 1932年  
 『昭和新修日蓮聖人遺文全集』浅井要麟編 1934年  
 『日蓮大聖人御書全集』堀日亨編 1952年  
 『昭和定本日蓮聖人遺文』立正大学日蓮教学研究所編 1952年  
 『昭和新定日蓮大聖人御書』大石寺 1966年  
 『福年体 日蓮大聖人御書』創価学会教学部編 1973年  
 『平成新福日蓮大聖人御書』大石寺 1994年  
 『平成新修日蓮聖人遺文集』米田淳雄編 1994年
- 3) 第二巻は1953年、第三巻は1954年、第四巻は1968年に発刊。なお第一巻と第二巻は正編とし、434編を収めている。第三巻は疑義のある続編の御書を始めとして図録、断簡類、御書諸目録などを収め、第四巻は追加・索引編となっている。
- 4) 「御書」と「定遺」の文書数の違いはわずか8編だが、「定遺」正編434編には図録と断簡は第三巻所収のため含まれておらず異同はかなりあることになる。「全集」にあって「定遺」正編434編にないのは45編を数え、その逆に「御書」426編にあって「定遺」正編にないのは53編に及ぶため、その差が8編ということになる。ということは両御書に収められる総数は $426 + 53 = 479$ 編となる。
- 5) 拙稿「御書・真蹟現存箇所一覧」(東洋哲学研究所紀要第10号1994年)「御書の文献学的基礎資料」(同第12号1996年)参照
- 6) 「大黒天神供養相承事」定遺No.統19,全集なし  
 「遠藤左衛門尉御書」 定遺No.統29,全集1336頁  
 「與平内左衛門書」 定遺No.統30,全集なし の3編

逆に刊本録外にあって「新撰祖書」ないものが16編ある。その中で定造番号の410,412,413,415,418,419,420,421,422,423の弘安4年下半月期述作の10編がそっくり落ちている。この漏れは、尾張の日妙本か、それを安政二年に書写した日聰本か、あるいは定造の三巻の編集時点か、いずれかで漏らしたのであろう。「定造」2832頁上段参照

## 7) 「録外刊本」ではさされた御書が「新撰祖書」の新加入之分

(定造2824-25頁)によって復活した例。定造正編には19編、全集には20編が加わることになる。以下はその一覧である。

定造No.	全集頁	御書名	録外の種別	備考
052,	0169	北条時宗への御状	満	
053,	0170	宿屋光則への御状	満	
054,	0171	平左衛門尉頼綱への御状	満	
055,	0172	北条弥源太への御状	満	
056,	0173	建長寺道隆への御状	満	
057,	0174	極楽寺良觀への御状	満	
058,	0174	大仏殿別当への御状	満	
059,	0175	寿福寺への御状	満	
060,	0175	浄光明寺への御状	満	
061,	0176	多宝寺への御状	満	
062,	0176	長楽寺への御状	満	
067,	0949	富木殿御消息	三 真蹟現存	
068,	1368	六郎恒長御消息	満	
079,	1110	月満御前御書	受	
122,	1358	諸法実相抄	受	
169,	1136	四条金吾殿御返事	受	
188,	1139	四条金吾殿御返事	受	
225,	1474	西山殿御返事	受	
341,	0902	寂日房御書	受	
統23,	0161	早勝問答	三 真蹟現存	

8) いわゆる十一通御書のうち「宿屋入道への御状」「平左衛門尉頼綱への御状」「北条弥源太への御状」「建長寺道隆への御状」「極楽寺良觀への御状」「大仏殿別当への御状」「寿福寺への御状」「浄光明寺への御状」「多宝寺への御状」「長楽寺への御状」の10編と「兵衛志殿御返事」(真蹟現存・全集1104・定造No.248)「御輿振御書」(真蹟現存・全集1264・定造No.64)「六郎恒長御消息」(全集1368・定造No.68)「妙法比丘尼御前御返事」(全集1419・定造No.423)の3編である。

9) この表を対告衆判定の一つの尺度として用いると次の二書の対告衆については疑わしいことになる。

①日妙への消息の漢字使用率は37.6%だが、「女人某御返事」(定造No.99、全集になし)は4.8%とかなり低く、この対告衆を日妙に比定するのは妥当ではない。

②光日房は13.6%だが、「法華経題目抄」(定造No.44、全集は「法華経題目抄」940頁)は46.2%でこれも光日房宛てとするのは妥当ではない。

10)	全文字数	漢字数	かな・カナ数	漢字使用率
満27	188	47	141	25.0%
日興写本	183	39	144	21.3%
日蓮真蹟	185	39	146	21.1%
満56	599	211	388	35.2%
日興写本	585	228	357	39.0%
日蓮真蹟	630	190	440	30.2%
(真蹟現存部分のみの比較)				
満112	491	173	318	35.2%
日興写本	510	139	371	27.2%
日蓮真蹟	521	136	385	26.1%
満29	326	186	140	57.1%
日興写本	400	50	350	12.5%
満92	350	139	211	39.7%
日興写本	375	112	263	29.9%
満111	530	253	277	47.7%
日興写本	575	191	384	33.2%
満193	156	69	87	44.2%
日興写本	151	54	97	35.8%
(日興写本の摩耗部分は除いた)				
満194	752	376	376	50.0%
日興写本	864	263	601	30.4%

11) 写本で「日蓮在御判」という表現を用いた最初は日興で、「録内刊本」「本満寺録外」でも用いられている。ところが『高祖遺文録』(1880年)『日蓮聖人御遺文』(1932年)『昭和新修日蓮聖人遺文全集』(1934年)ではすべて「日蓮花押」を用いている。例外として『日蓮大聖人御書新集』(佐藤慈豊編・大石寺・1929年)があるが、近世以前は「日蓮在御判」が主流であり、近代以後は「日蓮花押」が主流になったことができる。

12) 「花押」を「在御判」とすべき箇所(数字は「御書全集」の頁)

16,103,116,120,127,138,150,169,170,171,172,173,174,175,175,  
176,177,177,179,182,184,330,374,384,389,426,437,442,468,  
519,535,575,589,890,891,892,895,900,901,903,907,931,934,939,  
949(後),950,956,961,973,989,1000,1012,1017,1018,1023,1024,1025,

1054,1056,1058,1065,1069,1070,1078,1094,1096,1097,1102,1104 (前),  
1105,1109,1110,1112,1114,1115,1118,1123,1124,1132,1133,1135,  
1136,1139,1139,1143,1148,1150,1164,1169,1174,1177,1182,1184,  
1186,1188,1192,1194,1197,1198,1203,1210,1210,1212,1213,1217,  
1222,1227,1229,1230,1242,1242,1245,1252,1255,1260,1262,1262,  
1263,1283,1284 (後),1304,1306,1308,1316,1317,1330,1335,1338,  
1339,1343,1357,1368,1369,1373,1375,1377,1380,1387,1387,1388,  
1390,1390,1393,1394,1395,1397,1401,1403,1405,1418,1420,1424,  
1426,1435,1438,1446,1447,1449,1451,1454,1457,1464,1464,1473,  
1474,1477,1478,1479,1480,1482,1483,1483,1484,1485,1486,1491,  
1498,1503,1506,1510,1512,1512,1513,1515 (前),1528,1530,1530,  
1536,1536,1540,1543,1544,1546,1547,1550,1551,1552,1554,1558,  
1559,1562 (後),1546,1565,1566,1574,1577,1579,1579,1584,1584,  
1585.

なお例外として「日蓮」のみの表現が 1170,1336,1376 の 3箇所ある。

(こばやしまさひろ・研究員)